

「南」の世界を理解するオススメ 4冊

— アフリカから見る南北問題^① —

勝 俣 誠

地球買い物白書，どこからどこへ研究会，コモンズ，2003年

世界の半分が飢えるのはなぜ？，ジャン・ジグレル，たかおまゆみ訳，勝俣誠監訳，合同出版，2003年

アフリカン・アメリカン文化の誕生，シドニー・W・ミンツ，藤本和子訳，岩波書店，2000年

ガンジー 自立の思想，M・K・ガンジー，田畑健編，片山佳代子訳，地湧社，1999年

はじめに

初めて国際学部に入り，どんな授業をとり，どのようにそれぞれの学問分野に取り組んだらいいのか，どんな本を読んだらいいのかと，色々な問いや迷いがあるであろう。こうした問いを念頭に，私の担当する「南北問題」と「アフリカ政治経済論」を支える基本的考え方を国際学部というリベラル・アーツの文脈において，ごく簡単に紹介して，次に本を4冊ほど紹介してみたい。ここでリベラル・アーツとは「世界を広く考え，判断する力」としておこう。

世の中は著しく変化している。いつの時代にも変化を強調し，その変化が人類にとって良いものか，逆に害を及ぼすものか，それぞれの時代において人々は悩み，迷い，決断したり，あきらめたりしてきた。

第2次世界大戦後，植民地が独立することによって問題視されるようになった南と北の国々の間の経済・社会格差に注目する「南北問題」もいくつかの変化を遂げてきた。

1990年代以降を眺めても，それ以前の，例えば80年代に論じられた南北問題では登場しなかつ

た新しい現象，したがって新しい課題が生まれてきている。ここでは，それらをひとつひとつ吟味することはできないが，その最も顕著な現象変化の1つは一般にグローバル化と呼ばれる現象であろう。

グローバル化とは何か。ここでは，モノ，カネ，ヒト，情報が広域かつ高速で移動し，相互関係が緊密になっていく現象と大まかに定義しておこう。

1. 変わる南

より具体的には，かつて，「北」の先進国は工業製品をつくり，「南」の国々は工業製品の原料や鉱産物や食卓に供される農産物をつくり，お互いに交換し合うという図式が南北間貿易の一般的特徴であった。しかし今日は，この形に加えて「南」の国の中には電化製品からスポーツシューズまでつくり，私達の国の店頭で売り出すことができる国が出てきている。したがって，工業品はもはや「北」の独占品目でなく，「南」も今や多種多様な工業品をつくり，輸出しているのである。と同時に，アフリカのように未だ加工せず，原料のみを輸出している地域も存在し，これらの国にとって，天候の変化や国際市場での値段の変化が，

その国の人々の生活向上に大きな影響を与えている。

「地球買い物白書」は、グローバル化現象として、日本の市場で入手できる世界中からのモノがもともとそしてそもそもどう作られたり、採られたりしているかを身近な買い物品目の追跡調査から紹介したものである。私達は安くて良いものを買うことに思考を集中するが、もう一步踏み込んで誰が作り一体どこから来ているのかを考えてみることは、南北問題を考える重要な切り口の1つである。たとえば、この白書によれば、携帯電話のバッテリー原料はアフリカからもある。

2. 世界史の中のアフリカ

次にアフリカの歴史から南北問題を見てみよう。ある地域の人々が貧しいと言うとき、いろいろな理由が考えられる。戦争が続いて家族を失った場合、伝統が強く残り、身分社会を残そうとする特権階級が存在し普通の人々に富がゆきわたらないでいる場合、かんばつや洪水が続いて生業を営めない場合、たとえ売れても余りに安い利益が出ない場合などなど。

しかし、こうした貧困の様々な形を現象面だけで見るとはなく、その歴史的背景を見ることが南北問題の視点として重要である。貧困とは抽象的に人々に襲いかかっているのではなく、ある過去の経過によってそうなっているという視点である。

たとえば、西アフリカを見てみると、かつて幾つもあったガーナ帝国、マリ帝国、サモリ王国といった帝国や王国が今1つもなく、すべて1960年前後に独立した共和国である。確かにガーナという名のチョコレートの原料で有名な国がギニア湾にあるが、この国は1957年の独立に際し、かつての西アフリカの帝国の名にちなんでつけたもので、英国の植民地時代にはゴールド・コーストと呼ばれていた。

さて、なぜ王国がなくなったかといえば、ヨーロッパの列強が19世紀以来のアフリカでの大西洋奴隷貿易や植民地獲得競争で軍力で潰してしまったからである。これはアフリカの近代化にとっ

てとても大きな歴史的障害であった。なぜなら、王国と臣民の関係の中で、ある国がまとまっていくなプロセスが自然体で人々の間で学ばれていくからである。今日の先進国で王国から出発していないのは米国のみで、他はすべて王権の権力をどう制限していくかという人々の圧力で、今日の民主的で、経済的に発展した国づくりに成功し、臣民が主権在民の国民になったのである。

アフリカはこの世界史の中の強力な外部干渉によって、この内発的統治システムの学習の機会を奪われたまま、「独立」となり、今なお、この歴史的トラウマを背負っている大陸とも言える。

その最もわかりやすい事例の1つは、アフリカが今なお多くの食糧不足に悩まされていることである。食料援助を目的とする国連の世界食糧計画(World Food Program, WFP)の報告によれば、2003年に大規模な飢餓に直面している人々は4000万人以上と推計している⁽²⁾。その直接的原因としては、極度の貧困、かんばつ、戦争などが挙げられるが、より深い原因として、ヨーロッパによる植民地支配によって歪められた経済の仕組みが注目されなければならない。ヨーロッパ列強は、自分達の国の都合に合わせて、アフリカをコーヒー、茶、カカオ豆、落花生、綿花などの1次産品原料供給先に変えてしまった。その結果、しばしば、自国の食糧生産がないがしろにされ、西アフリカなどでは、アジアのコメを大量に輸入しながら、豊かな先進国市場向けに1次産品原料を生産してきた。独立後もこの外部依存体質が強く残り、今だ穀物などの食糧は「北」の先進国の援助や貿易に大きく依存している。アフリカや南米などの「南」の国々を駆けめぐって「飢え」を世界の歴史や今日の国際関係から解明しようとしている最近の本として、ジャン・ジグレルの「世界の半分が飢えるのはなぜ」がお薦めである。筆者が自分の子供に飢えについての背景を語るという形式をとっている本で、読みやすい。こうした本によって、世界の飢え、とりわけアフリカの飢えが単に天災でなく、歴史的に生み出され、現在も国際政治や国際経済の仕組みが大きく飢えの発生に作用していることが理解できるであろう。

他方、奴隷として海をわたったアフリカ人はカリブ海やアメリカ合州国の国づくりに貢献し、米国では今なお、人口の12%がアフリカ系アメリカ人となっている。そして今なお、米国では、人種による富の不平等がかなりはつきりと残っている。キング牧師が主となって実現したワシントン大行進から40年経ったが、米国の国勢調査では、公民権法成立後の40年間、黒人家庭の平均的所得は未だ白人家庭のほぼ6割にとどまっているとしている。ある地域活動家の1人は、次のように言っている。「黒人が白人と同じレストランに入れば、不平等が解消するわけではない。同じ料理を注文できる日が来るまで道のりは遠い。」と指摘している。(日経新聞、2003年8月27日)

さて、この歴史の中で、確かにアフリカ人は被害者であったのに違いないが、同時に強制連行された異国の地で、逞しく想像力豊かに生き残り策を求め続けてきたことも、単に暗い世界史に1頁としてのみ位置づけることはできない。世界の中のアフリカは、確かに米国やブラジルなどの強制移住先で、いわば国内の南北問題を今日も生じせしめているが、また地域や世界に独自の文化を発信する主体とも成ってきている。ジャズ、レゲエ、サルサなどはその好例であろう⁽³⁾。こうした生き残りにおけるアフリカン・アメリカ人の創造性について気づかせてくれる本としては、シドニー・W・ミンツの「アフリカン・アメリカン文化の誕生 — カリブ海地域黒人の生きるための闘い」をお薦めしたい。

たとえば、アフリカからカリブ海域に奴隷として強制連行されたアフリカ人は、彼らを酷使する農園主から自由を求めて逃亡し成功する者もあったが、多くは、農園主のもとでの強制労働につかされた。しかし、当時の奴隷の食生活に注目してみると、自由を奪われていながら、地域で取れる食材を活用して、食の味と自由の味を結びつけていく。ついには農園主もその味に病みつきになってしまう。筆者のシドニー・W・ミンツは、「食の問題は、食べるという生物的行為としてだけでなく、すべてを奪われていた人々が全人的な行為として、いかにして自らの生を再建していったの

か、その脈絡において捉えるべきだ。」(217ページ)として、奴隷がアフリカン・アメリカンの食文化を主体的に形成していく過程を再構成しようとしている。

この本で登場するアフリカ系アメリカ人の文化史を通じての描写は、今日の南北問題においての「南」の人々を、単に「貧しい人々」としてのみ捉えることが、逆に一面的な貧しい見方であることを示唆している⁽⁴⁾。

最後にまさにこの視点から、「南」の中の「南」とも言える今日のアフリカは、本当に貧しいのかという問いを、地球文明の展望と絡めて考えてみよう。

3. 地球文明と南北問題

南の地域や国を格差としてみるのは南北の基本であり、アフリカはこの意味で最貧国とか後発発展途上国などと国際機関で呼ばれる、世界で最も貧しい地域が集中している大陸に他ならない。

しかし、格差原理には落とし穴がある。その幾つかを指摘してみよう。

まずは、格差解消とは遅れているものが追いつかねばならないという意味で、先進国と同じことをしなければならない。「北」と同じ経済成長を追求してこようとしてきたアフリカなどの最貧国地域は、いつまで経っても格差は縮まっていないことが判明している⁽⁵⁾。

第2には、貧困は単に収入の不足ないし欠如であるだけでなく、社会関係の貧しさが格差では見えなくなってしまうということである。お金でしか測れない分析用具では漏れる、人生の意味、生き甲斐、心の豊かさなど生活の質が見えない。

ここから1つの結論が導き出される。アフリカは日欧米のような最先進国をひたすら追い求めることを再考することである。今、私達が考えなければいけないのは、「北」と「南」の経済成長指向を前提として地球文明を展望するのでなく、「北」の方は量的成長よりも生活の質の向上を追求し、「南」へと歩み寄るようなシナリオを想像してみることである。

もっともこの新しい地球文明を模索する作業は容易ではない。従来の国際経済学、国際政治学、国際社会学などの社会科学それぞれの枠組みではとうてい対処できるものではない。社会科学以外の人文科学、自然科学の発想、手法、それらの成果にも目配りが必要だろう。まさに、国際学のアプローチが要求される由縁であろう⁶⁾。

ここでは、私が多くの示唆を受けたガンジーの本を一冊提示して、学生諸君の判断に任せよう。

ガンジーはインドの独立の父として広く世界に知られているが、彼の思想・行動は、英国の植民地インドという「南」の地域の人々の人間の尊厳の回復に尽力した指導者という以上に、今日の南北問題を単なる格差原理を越えて、北と南の共生原理に基づいた地球文明のあり方を考える上で、いくつかの重要な思考の切り口を与えてくれている。ガンジーの著作についての訳や解説は多く出版されているが、私が推薦したいのは、ガンジー思想の単なる解説でなく、その実践を模索している編者自身の手による訳・解説書の「**ガンジー 自立の思想**」である。

実際、ガンジーほどもっとも恵まれていない人々の生活が改善されることによって、始めて自分は安心するという主旨を明快に誰でもわかる表現で述べている思想家は少ない。この原則を今日の南北問題にあてはめてみると、世界の難民、HIV/AID感染者、極度の貧困層が集中する世界人口の12-13%を占めるアフリカ地域の人々が尊厳ある生活を取り戻せない限り、地球社会の人々は心安らかに成れないということになろう。アフリカ問題が21世紀の南北問題と重なりあう由縁である。したがって、「北」は「南」の中の「南」であるアフリカの人々が置かれている状況を改善するための援助を惜しまないという同時代人としての責務を負う。

しかし、アフリカを単に援助の対象としてみるのではなく、私達「北」の生活、生産活動を再考させてくれる意味で、逆にこの地域に学ぶこともあるのではないだろうか。

くり返すごとく、今日のグローバル化する南北問題は、単に経済格差是正問題でなく、一体どん

な地球社会、ひいては地球文明を構想するかという問いを私達に突き付けている。20世紀前半を生きたガンジーは欧米が強引に進める残りの世界、とりわけインドのような「南」の世界を呑み込もうとしていた大量生産に立った工業ないし機械文明に対し、弱き人々の自立の観点から深く懸念を抱いていた。

本書で見い出されるガンジーの発言や記述は、平易な文章ながら読めば読むほど考えさせられるものである。今回は、ガンジーが機械に任すのではなく身体を使うことを、欲望を解放するのではなく、節度をもたらすことによって、逆に、人はよく生きれるという2つの考えを今日のアフリカの文脈からごく簡単に紹介しておく。

第1は、身体性の重視は、例えば「すべての人が自分の糧を得るために必要なだけ働けば、すべての人が十分な食糧と余暇を手にすることができるでしょう」(74ページ)という一節に明快に表現されている。

私はアフリカの農村を訪ねるたびに、簡素な農具で大地と格闘している農民家族を見てきた。多くの場合、彼らがもっとも重視するのは自分達の家族を養うための食糧生産である。貧しくて、きつい労働かもしれないが、かたや日本に戻ると、もはや大地と格闘する農民像はもはや思い出すのが困難である。

それどころか、仕事は細分化され、食糧生産は遠い外国でなされ、身体を使って食を得ることはまずあり得なくなっている。生きるための栄養問題より過剰な栄養摂取の対策として、スポーツジムなどで身体を使っているのが現状だ。

ガンジーの身体論は、知的労働の優位の上にありますます肥大する「北」の社会のあり方を私に問いかけている。

第2の節度とは、財産から名声まですべてを手に入れようとする欲張りの反語である。近代文明の飽くなき欲望と便利さの追求に対し、「人は何のために生きるか」という問いを支える概念である。むしろ欲望や便利さを自己目的としない生活スタイルによって、人々は他者を考える余裕を持てるのではないかという共生の原理を考えるきつ

かけを作ってくれている。例えば、アフリカの村では、村長はしばしば村の土地を一部の村民や外部のカネのある人に集積させるのではなく、すべての村民がほどほどまで食べられる土地を配分することに心を砕く。

グローバル化現象を南北問題から読み解こうとするとき、ガンジーの著作は、近代に対するその根本的問いかけゆえ、私達は一体どこに向かおうとしているのかという問いに対しても切り口を与えてくれている。

しかし、この問いかけは余りに根本的で壮大だ。その1つ1つをていねいに応えていくためには、飽くなき知的好奇心を持って、国際学部の提供する多様な授業・演習に積極的に参加してほしい。

また、明治学院大学全体の研究機関である国際平和研究所（略称 PRIME）は、開発、人権、環境、ジェンダーなどを考える小冊子「みなみを考える」シリーズを発行したり、全学の学生が参画できる平和に関するイベントをサポートしているので、こうした大学機能を活用することも学び方の1つとなる⁷⁾。

むすびにかえて

— 身の回りを読む，地域を読む，世界を読む

以上、初めて国際学部に来る学生向けに私の担当する授業の入り口の入り口として、4冊ほどの本をオススメ本として簡単に紹介した。この4冊は知的好奇心に火をつける点火剤に過ぎず、基礎文献ではないことに留意して欲しい。

最後に、これらの2授業を学ぶ基本的方法について、4点示唆したい。

第1は、身近なモノやコトに素朴な疑問を持ち、その背景を探り、世界の出来事と結びつけてみることである。南北問題にせよ、アフリカ地域研究にせよ、学ぶとすぐ就職に有利になるとか、仕事上役立つという学問分野ではない。自分の生活空間から「南」で起きていることまで想像してみるには、何よりも知的好奇心が必要である。しかし、身近な消費財の原料供給先、建設業や飲食店での外国人労働者の存在など、身の回りにも「南」へ

の想像力をかき立ててくれるモノやコトはいくらでもある。

第2は、こうしたモノやコトの相互の結びつきを分析する力を学ぶことである。政治、経済、社会、歴史、文学、哲学、生物など、国際学部には幅広い授業メニューが用意されている。分析なくして事実関係はない。その多様な分析道具をどこまでしっかりとかつ豊富に身につけられるかが、世界をどこまで解読できるのかの力を決定する。全天候型の道具箱を自分でつくってみよう。

第3は、五感を駆使して、歩き、考え、そして歩くこと。インターネットと読書だけが知の源泉ではない。身体のもつ様々な機能を活用して、知ろうとしなければならない。とりわけ、南北問題や地域研究は、旅をしたり、当事者に会いに行ったり、そこに生活したりして、積み上げていく学問である。体を動かして得る知識は強固なるものである。

最後の第4は、日本語と英語以外に第3の外国語を少しでも学ぼうとすることだ。これは、情報源を多様化することであり、とりわけ「南」地域の研究は英語だけでは不十分だ。そして、そもそも私達を受け入れてくれる地域の人々に対する礼儀でもある。

注

- (1) 本稿は2003年9月27日、国際学部の受験に関心のある方々に向けた公開模擬授業（オープン・キャンパス）に際し作成された講義ノートに加筆・訂正したものである。
- (2) WFP Japan Office News Release, 7, Oct. 2003
- (3) たとえば、ジャマイカのボブ・マーリーのバッファロー・ソルジャー（CDのタイトル：Legend, the best of Bob Marley and the Wailers, Tuff and Cong）やキューバのイブライム・フェレルのBruca Maniguá（CDのタイトル：Ibrahim Ferrer, Buena Vista Social Club, WcD 055）はいずれもアメリカに連行されたアフリカ人の生き残るためのたくましさをテーマとしている（次頁写真参照）。
- (4) 筆者は自分の「南」の認識の一面性を反省して、1990年始め「アフリカは本当に貧しいのか」というエッセーを出版した。今日でも「北」の社会の特質を明らかにする材料としてのきわめて抽象化した「南」像を設定したり、逆に「南」の貧困



を「北」の貧困を問わず、一方的に論断する論評が多く存在する。前者の代表的なものとしては、たとえば、「北」の情報化・消費化社会を「南」の「闇の巨大」と対比して論じている見田宗介、「現代社会の理論」、岩波新書、1996年。後者のごく最近のものとしては、現在の「南」の歴史と地域研究を無視した経済学原理から「南」を分析している「エコノミスト 南の貧困と闘う」ウィリアム・イースタリー、東洋経済新報社、2003年があげられよう。

- (5) 世界開発報告 2000/2001 貧困との闘い、世界銀行、シュプリンガー、2002年、88ページ
- (6) 国際学のあり方、方向づけについての試論的考察は、勝俣誠、国際学としての「南北問題」研究、明治学院論叢、国際学研究16号、1997年、73-83ページ参照。
- (7) 様々なイベント、刊物などの最新情報について、明治学院大学ホームページの国際平和研究所 <http://www.meijigakuin.ac.jp/~prime/> を参照することができる。

また研究所も訪問してみよう。「みなみを考える」など無料で資料を入手できる。場所は、横浜キャンパスは8号館3階、白金キャンパスは本館9階。